

2月号から掲載している「在留邦人」加治屋百合子さんのお話、3月号の中編(Part2)に続く後編(Part3)です。前回までのお話:加治屋さんは、幼稚園の時に習い事の一つとしてバレエに出会い、10歳で上海国立バレエ学校へ入学しました。ローザンヌ国際バレエコンクールで入賞し、カナダのバレエスクールを経て、憧れだったニューヨークのAmerican Ballet Theatreに入団。トップダンサーとして花開いていきます。(佐藤暁子)

## 加治屋百合子さん ヒューストンバレエ プリンシパル (Part 3)

### ●ヒューストンバレエ団へ

—中国、カナダ、アメリカと激動の人生ですね。加治屋さんがヒューストンバレエに移籍するというニュースは、ヒューストンクロニクルの1面に載ったので、私はとも印象に残っています。

13年間所属していたABTを離れることは一大決心でした。バレエ団よりサヨナラ公演を企画していただき、ニューヨークのファンの皆様へ感謝をお伝えすることができました。最高の仲間と古巣を離れる寂しさはありましたが、自分の成長のために移籍を決断しました。

ヒューストンバレエは、立派なスタジオと劇場、そして私の躍りたいレパートリーを数多く持っています。特に、全幕クラシックバレエのレパートリーが多くあるので魅力を感じました。全幕バレエは、セットや衣装にお金がかかるので、バレエ団がコンテンポラリーダンスを中心とするレパートリーに移行する傾向となり、全幕バレエを踊るバレエ団が限られてきています。

監督をしているスタントン(★1)は昔から知っておりまして。実はABTに入団した当初、例の9・11のテロがあった週に、彼は若い振付家として振り付けに来ていたので、もう20年来の信頼できる関係です。スタントンは、私がこれまで演じることがなかった役で私を引き出し、表現の場をより広げてくださいました。

人生は何が起ころ、どこで繋がっているかわからないものだと感じています(笑)。

—ヒューストンに来た時、いきなりトップから始められたのですが、他の団員の方の反応はいかがでしたか？

ダンサー達にとって最初は気分の良いことではなかったと思います。しかし、踊りの表現やテクニックを見て受け入れられたように感じます。

—それに、百合子さんの人柄もあると思います。来るものは拒まずというか、お話を聞いていると、自分が置かれた環境を素直に受け入れている感じがします。

そうですね。私は何が最良なのか、物事をよく考える方です。実は、移籍の決断を下すまで2~3年ほど悩みました。私が信頼しているコーチより「成長のために旅立ちなさい」と後押ししていただき、移籍を決めました。

ヒューストンに移り始めの1年は、運営からリハーサル方法、バレエ団の個性と何もかもが今までとは違い、続けられるのかと辛く感じる時も多々ありました。それらを乗り越えヒューストンでは7年が経ち、バレリーナ人生は20年目を迎えました。

### —これからの展望は？

私は10代の頃から現役のダンサーとして子供達や大人のクラスで教えて欲しいと依頼を受け、レッスンをする機会に恵まれてきました。ここ数年は日本のバレエ団からも指導の依頼をいただけるようになり、とても光栄に感じております。私は恩師であるイリーナ(★2)に指導を受けた影響がとても大きかったと思います。彼女は、ロシアの伝説の押しプリマで、長年ABTそして世界中のダンサーをコーチしています。自分の意見を押し付けることなく、ダンサーそれぞれの性格によって教え方を変えながら、そのダンサーの良さと才能を伸ばしてくれます。ダンサーとして素晴らしくても、教えることが苦手な人もいます。私は、自身の得た経験と知識を次世代に繋げることもバレリーナとしての使命だと思っています。私が学生の頃、現役トップダンサーからレッスンを受ける機会がありました。その時のアドバイスで、頭の中の電球がパッとついた様な感じがしたのです。これまで先生が100回くらい同じことを言っていたのに、現役のダンサーが体を使って表現し伝えるだけで体に入る影響力がこんなに違うんだと身に染みて感じました。まだ現役として踊っているからこそ、今の自分にしか伝えられないことがあるのだと思っています。

—ヒューストンバレエは、日本人ダンサーが増えてきました。

ABTでは、長年日本人ダンサーが私一人の後輩が入ったのは最後の1年でしたが、ヒューストンでは日本人が多く後輩たちが頑張っている姿を見るのはとても嬉しいことです。私達はとても仲が良く、よく一緒に集まり助け合っています。

日本人ダンサーは、真面目で丁寧な踊りをします。また、当たり前のことですが、与えられた仕事をきちんとこなす姿勢に、スタントンは仕事がしやすいと感じていると思います。そして日本人ダンサーは、テクニックがあり才能を兼ね備えた人が多いです。

—百合子さんは、日本に10年しかいらっしやなかったわけですが、アイデンティティはどうなのですか？

中国国立舞踊学校にいた時は、国家を背負ったエリートクラスの中、先生に他の中

国人生徒のようにレッスンをしてもらえなくて日本人であることが嫌いでした。中国人であれば認められるのではないかと思い、自分が日本人というアイデンティティはありませんでした(苦笑)。

その後カナダ、アメリカに渡ると「Where are you from?」と聞かれたとき、「中国に留学していた日本人です」ではなく「I'm from Japan.」と答えを繰り返すうちに、私は日本人なんだと自覚するようになりました。

ABTでは2、3年に1度日本ツアーが行われていました。日本ツアーがアナウンスされる度、誰もが「YAY!」と大喜びです。「日本はとてもきれい」「日本人は親切」「日本食が美味しい」など、みんな日本が大好きで褒めてくれるので、だんだん誇らしくなりました。日本人が自覚していない日本の良さと、日本人の気質は素晴らしいんだと気づき、日本人であることを誇りに思えるようになりました。

小学4年生で日本を離れているので、ABTの日本ツアーで初めて明治神宮に行ったり、京都にもダンサー仲間と行きました。まだ行っていないところですか？北海道に行きたいです。去年バレエセミナーで行く予定があったのですが、コロナで前日にキャンセルになってしまいました。楽しみにしてたのですが、仕方ないですね。

—ヒューストンの中で、これから日本人コミュニティとどんなふうに関わっていききたいですか？

これまであまり関わりがありませんでしたが、ヒューストン日本人コミュニティを通じて、いろんな方と繋がれることを、大変嬉しく感じています。

昨年10月、ヒューストンバレエ団に所属する6名によるパフォーマンスを日本人会のイベントで披露する機会をいただきました。たくさんの方にバレエを覗いていただくことができ、「初めてバレエを観ました」「今までバレエに興味はあったけど、どう観たらいいかわからなかった」とバレエに興味のなかった方が興味を持ってくださいました。また「子供が小さくて観に行けなかったから、本当によかった」と声をかけていただき、新たな出会いを持つことができました。

海外で生活をしているということは、日本の家族や友達から離れているという共通点があります。日本人同士が助け合い、つながりを持つことはとても心強く、大切ですし、アメリカにいながら日本の方に応援していただけるのは特別でとても嬉しいです。

中国、カナダ、アメリカと、どこでも前向きにひたむきに踊りと向き合って成長を続ける加治屋さん。コロナ禍で公演が行えなかった間も、「今できること」を探り、オンラインを通じてバレエの魅力発信し続けていっしやいました。踊りにこめられたそのエネルギーは観る人に伝わり、そこで受けた感動は、生きていることへの喜びや感謝にさえ変わります。

昨年の後半からは、舞台での公演も少しずつ始まり、ますます円熟した加治屋さんの踊りが、これからも様々な形で観られるのが楽しみです。[ヒューストンバレエ団の日本公演](#)も10月に予定されており、日本とのきずなますます深まりそうです。

★1:スタントン・ウェルチ:世界的に著名なヒューストンバレエの芸術監督(2003年7月就任)。「マダムバタフライ(蝶々夫人)」は国際的にも高く評価されているウェルチ氏の代表作。オーストラリア、メルボルン出身。  
★2:イリーナ・コルパコフ:1950年代から70年代にかけて活躍した、ロシアを代表するバレリーナ。完璧なテクニックと詩情が融合したバレリーナと評されていた。

【加治屋百合子さん略歴】 愛知県生まれ。8歳よりバレエを始める。

1994年:10歳で上海バレエ学校に留学

1997年:中国タオ・リ・ベイ全国舞踊コンクールで優秀表現賞を受賞。

2000年:ローザンヌ国際バレエコンクールで「ローザンヌ賞」を受賞し、カナダ国立バレエ学校に入学。

2001年:アメリカン・バレエ・シアター(ABT)のジュニアカンパニーに入団

2002年:アメリカン・バレエ・シアター(ABT)のコール・ド・バレエとして入団

2007年:ソリストに昇格。「くるみ割り人形」、「コッペリア」、「ジゼル」、「テマとヴァリエーション」、「ドンキ・ホーテ」、「パキータ」、「パロ・デラ・レジーナ」、「ラ・バヤデール」、「眠れる森の美女」等に主演。

2007年:TBS系列局の人間密着ドキュメンタリー「情熱大陸」に出演

2011年:アメリカン・バレエ・シアターの来日公演では、「ドンキホーテ」で主演、その様子を追ったドキュメンタリー「バレリーナYuriko〜輝きの舞」がNHKにて放映された。

2014年:7月アメリカン・バレエ・シアターを退団し、ヒューストン・バレエにファーストソリストとして移籍

2014年:11月プリンシパルに昇格

2015年:9月アメリカ「タイム・マガジン」が選ぶ次世代のリーダーに選ばれる。

2021年:第71回芸術選奨文部科学大臣賞受賞

日本、全米各地のバレエ団、ガラ公演に招かれる他、講習会を開き講師としても活躍している。



▲Houston Ballet Principal Yuriko Kajiya as Cio-Cio San and First Soloist Christopher Coomer as Sharpless in Stanton Welch's *Madame Butterfly*. Photo by Amitava Sarkar (2016). Courtesy of Houston Ballet.



▲第71回芸術選奨文部科学大臣賞受賞